

三教（神道・仏教・儒教）を利用する政権

梅 一声

はじめに

中国の三教と言え、道教・儒教・仏教となりますが、日本では三教と言え、ば神道・仏教・儒教となります。

三教は三つの教えですが、宗教でもあり思想でもあります。

現在も神道と仏教は生活の中に深く入っています。神社詣、お祭りや結婚式は神道ですし、又多くの方が仏教のどこかの宗派に属し、葬式は多くの方が仏式でおこないます。そして盆や彼岸だと言って墓参りをします。

現在、儒教は一般人にはなじみが薄くなりました。戦前までは、道徳（忠孝）の出所は儒教からが多かったのです。

この三教は古代から日本人の信仰の対象として又社会正義や道徳基盤においての心の支えでありました。

しかし三教を個人の信仰の対象として又教えの内容の崇高さだけを見るわけに行きません。

三教に対しては古代からその時代の政権が政権安泰のために深く関与し、利用して来たことを考察します。

先ず第1部で三教についてそれぞれの内容、教えや布教状況についてまとめます。

そして第2部では歴史上の政権が三教をどのように利用してきたを述べます。

目次

はじめに

第1部 三教（神道・仏教・儒教）の内容・教え

- 1、 神道
- 2、 仏教
- 3、 儒教

第2部 日本史における歴代政権の三教の利用

- 1、 古代の大和王朝
 - (1) 日本固有の神と異国の神である仏の関係

- (2) 儒教の伝来
 - 2、 中世の武家政権
 - (1) 習合された神道と仏教
 - (2) 二度目の儒教伝来
 - 3、 近世の三教の位置
 - (1) 神道と仏教
 - (2) 三度目の儒教伝来
 - (3) 幕末の神道 (国学)、儒教と仏教
 - 4、 明治政府以降の三教の位置
 - (1) 神道と仏教の位置の逆転
 - (2) 教えは続くじゅきょう
- おわりに

第1部 三教（神道・仏教・儒教）の内容・教え

1. 神道

日本固有の神への信仰で、神は天皇家を含む豪族たちの祖霊神や村々の鎮守の神様たちです。

天皇家の祖霊神は皇祖神と言いますが、イザナミ、イザナギ、天照大神から神武天皇に続きます。日本の誕生から天皇家の歴史については古事記や日本書紀で詳しく記述されています。

簡単にいいますと天照大神を頂点とする神々への信仰です。元々は皇室だけが皇祖神として崇めていました。

時代が下ってやがてその他の豪族たちの神々や村々の鎮守の社（やしろ）の神々は天照大神の下に包摂されていき、神道という宗教となりました。

特に教えはありません。

あの世のことも語りません。

現世のことをお祈りしてお願いし、崇めます。天皇は国家安泰、五穀豊穰と天皇家のいやさか等を祈られますが、その外の一般人は家内安全、病氣平癒、安産、子宝、開運等々この頃は交通安全もあり、数えきれないほどの祈願がります。

実は日本の神様は罰をあてたり、何も悪いことはしていないと思われるのにたたりをします。

疫病をはやらせたり、干ばつを起こしたりします。その時は神様をなだめる厄除けや雨乞いのお祈りをします。

それから神道には教えはありませんが、神は不浄をきらいます。神社には玉砂利が敷きしめられており、いつも清潔感満ちあふれており、すがすがしさを

感じます。

日本の神道はこの世で生きていくための道徳、倫理の教えがなく、人間が死んだ後あの世（仏教での来世）のことについてもはっきりしません。

死んだら霊となり（祖霊）この世に漂っているが、生きている人間には見えなと言われてはいますが、神と死んだ人との関係がはっきりしません。

死んだ人の中には神になる人も平安時代あたりから出てきました。明治以降は大変多くなりました。

古くは菅原道真（天満天神）、豊臣秀吉（豊国大明神）、徳川家康（東照大権現）が有名ですが、明治以降では明治天皇（明治神宮）、乃木希典（乃木神社）等々多くあります。靖国神社祭られている戦死者も神になったのです。

多神教ではありますが、このように教えがなく、あの世ことについてほとんど説明がありませんので宗教とは言えないとか原始宗教（太陽や火を崇める原始人の信仰）と言う人もあります。しかし伊勢神宮、出雲社、賀茂社、石清水社、春日社、熱田社、氷川社等々の荘厳なたたずまいを1千年以上維持してきた実績があり、我々の住まいの1～2キロメートル以内には神社や祠（ほくら）があります。それぞれ歴史があり、年年お祭りが続いていることは、やはり日本人にとって大事な信仰の対象であり、宗教の一つと言えるでしょう。

2. 仏教

仏教は538年欽明天皇の時代、朝鮮の百済から伝来したのが通説です。

仏教はこの世（現世）の生き方、道徳についての教えが一杯で、お祈りによって現世利益の見返りがあり、死んだ後の来世は極楽浄土に行って幸せに暮らせることになっています。この世で悪行をつくした人は地獄が待っています。

インドが発祥でお釈迦様が教祖様で神様みたいな方ですが、お釈迦様が亡くなった後、後世の仏教専門家が日如来、阿彌陀如来、薬師如来等の仏様を釈迦如来と同等の位置に作り上げ、外にも観音様、お地蔵様等多くの仏様を作りましたので多神教と言って良いでしょう。

お釈迦様の教えは悟りについて説いているのですが、お釈迦様が述べなかつたあの世の事、現世利益等数々の教説を後世の仏教徒は作りだし広めました。これが唐経由日本に伝わった大乘仏教です。

日本に伝来した時は釈迦仏（如来）と共に毘盧遮那仏（真言宗では大日如来）がもてはやされました。この毘盧遮那仏は奈良の大仏で有名です。国家鎮護の仏様として天皇家は崇拝しました。

阿弥陀如来は死んだ後、西方極楽浄土に導いてくれる仏様です。薬師如来は東方瑠璃浄土におられて病氣平癒の仏様です。如来の下位の仏様としては弥勒菩薩、観音菩薩、地蔵菩薩等の菩薩や増長天、持国天、多聞天等の天部がおられます。

みんなお釈迦様でなく後世の仏教徒が考え出しました。でも日本に伝来以来今日までこれらの仏様を総合して仏教です。

仏教はいくつかの宗派に分かれていますね。これについても簡単にふれて置きます。

仏教が伝来し、奈良時代までは宗派の意識はほとんどありません。南都六宗と言われ三論、法相、華嚴、律、成実、俱舎がありましたが、僧侶は六宗全てを学びます。お寺で得意科目はあります。例えば華嚴宗は東大寺、法相宗は薬師寺、律宗は唐招提寺が得意です。

平安時代に入りますと宗派がはっきりしてきます。最澄—天台宗、空海—真言宗、平安末から鎌倉時代に法然—浄土宗、鎌倉時代に親鸞—浄土真宗、栄西—臨済宗（禅宗）、道元—曹洞宗（禅宗）、日蓮—法華宗（日蓮宗）等が起こり独自の教説を建て、宗派活動即ち布教を行います。（宗旨と言います）

天台宗は、法華経、浄土宗、禅宗、密教をも含む幅広い教えです。

真言宗は密教です。あの世も語りますが、現世利益を重視します（雨乞い、疫病退散、子宝、その他諸々のご利益）

浄土宗や浄土真宗は南無阿弥陀仏と唱えれば、死んだ後、阿弥陀如来のおられる極楽浄土に行けるとの教えです。

禅宗は、座禅を組んで悟りを得ることを目標とします。

法華宗（日蓮宗）は、他の宗派が「南無阿弥陀仏」となえますが、日蓮宗だけは「南無妙法蓮華経」と唱えます。それだけ法華経に帰依しているのです。法華経は、お釈迦様の生い立ちを記述した経典です。

真言宗以外は最澄の延暦寺から分派した宗です、奈良（南都）の寺々も独自の行動を続けます。

宗派によって上記の特徴はありますが、しかし室町時代中ごろから日本の仏教はどの宗派も現世利益と極楽浄土を売りものに信徒を拡大しますので、庶民にとっては似かよってきます。葬式仏教の始りとも言われます。

そして今日まで仏教の信徒はどこかの宗派（宗旨）に属しています。江戸時代は強制的にどこかの寺の檀家にならなければなりませんでした。

3. 儒教

儒教は今日では人気科目ではなくなりましたが、古代から江戸時代までは

公家、武家の必須科目であり。そして明治から太平洋戦争まで即ち敗戦以前までは道徳として教えられました。

儒教は中国の春秋時代に孔子（紀元前551～479）が教えを説いたことを元にします。

その後100年後に孔子の教え「儒教」を孟子が広め、教えの中味を確立して行きました。当時諸子百家と言われ、道家、墨家、法家等の多くの思想家が出ましたが、孟子によって儒教の位置は確立されました。その後紀元前213年、秦の始皇帝の焚書坑儒（儒教を攻撃して関係の書を焼いた事件）で一時は儒教は後退しましたが秦滅亡後は道教、仏教と共に中国の主要思想、宗教となって行きました。

孟子の後は戦国期末（紀元前3世紀）に荀子が、宋から南宋時代にかけて朱子（朱熹）が、明時代に王陽明が現れ、儒教が興隆して行きました。

儒教とはそもそもどんな教えなのか。一言で語れない難しい事なのですが、あえて語ってしまいます。

孔子の教えとされている有名な「論語」は孔子が書き著した書物ではありません。キリスト教の新約聖書がそうであるように孔子没後弟子たちが、孔子が存命中に語った教えを持ち寄って編集した書物です。

孔子自身は当時既にあつた古典の五経ごきやう「詩経」・「易経」えききやう・「書経」しよきやう・「礼記」らいき・

「春秋」しゆんじゆうをもとに弟子たちに講義しました。

五経の中味を一言で言えば、「詩経」は詩作、「易経」は吉凶の占い、「書経」は政治学、「礼記」は礼儀、「春秋」は孔子の地元の魯の国歴史です。

孔子の教えのエッセンスは「仁」・「義」・「礼」・「知」・「(信)」につきますが、「仁」は愛、人への慈しみ、「義」は正義。「礼」は礼儀。「知」学問をして知識を得る。「信」は入れないこともあるのですが、信頼のことです。

孝（親に孝行）や忠もありますが、これ等は後世に強調された教えです。

孔子は君主（王侯）や君子（為政者、紳士）の道徳、心構えを説いたものです。後世は一般人の道徳、教養の教えにもなりました。

宗教色は薄く孔子は神については語っていませんが、孔子自身は鬼神（祖霊・天）については信仰していました。

論語のイメージを見て頂くために何百とある論語の章の一句を抜き出して更にその中の一部の文言をを紹介します。

・朋（とも）有り遠方より来る亦楽しからずや。

- ・故（ふるき）をたずねて新しきを知る（温故知新）
- ・過ぎたるはなお及ばざるがごとし
- ・にわとりを割くにいづくんぞ牛刀を用いん

いずれも句も前後に言葉があるのですが、ここでは論語の雰囲気だけを見ることで割愛しました。

儒教は孔子の道德の体現者としての孟子によって発展し、孟子の流れをくむ朱子などによって儒教の解釈論が盛んになります。

孟子は性善説を唱えました。

朱子は四書を選定しました。即ち五経よりも「大学」、「中庸」、「論語」、「孟子」の四書を読めば儒教は学べるとの説です。

「大学」は礼記の一部を朱子が、「中庸」は同じく礼記の一部を子思（孔子の孫）編集したもので、論語は孔子の教えを弟子がまとめたもので、孟子は孟子の説です。

日本に儒教が伝来したのは仏教と同じ頃かもう少し前かと言われています。6世紀初めでしょう。これが第一回の輸入期です。

漢学（五経、史記、漢書等）の中に論語、孟子は入っており、飛鳥時代以降貴族やインテリ一階級の必須の教養科目でした。

論語や孟子は道德として読まれました。又漢文のお手本でもあります。日本は古代から江戸時代まで公用語は漢文です。今日使われるひらがなの入った和文ではありません。漢文の読み書きができませんと為政者、官吏や僧侶になれません。

奈良時代、平安時代の学者は、論語、孟子等の漢学に精通のため勉学に励みました。

儒教輸入の第二期は鎌倉時代初めに禅僧によってもたらされました。禅宗の僧が為政者の道德として儒教を布教しました。

第三の輸入期は戦国時代の終わりごろです。儒教の三派である朱子学、陽明学、古学がいっぺんに入り、国内の儒教学者間で論争となりました。

朱子学は上述のように朱子が宋～南宋時代に成ったもので、明朝で正式に採用され、科挙の儒教試験は朱子学によって解答しなければ合格しないことになりました。

陽明学は朱子学一派と考えると良いのですが、朱子学が観念論が強いのに対し実践論を主張したことにあります。

古学は清朝が取り入れた説で、四書（大学、中庸、論語、孟子）よりも孔子が教科書とした五経（易、書、子、礼、春秋）を重視した儒教です。

第2部 日本史における歴代政権の三教の利用

第1部では日本の三教（神道・仏教・儒教）の教えと内容をお話ししました。

ここでは日本のそれぞれの政権が古代より太平洋戦争終戦まで、日本の統治のためにどのように三教を利用してきたかを語りたいと思います。

三教はそれぞれ絶対の神や仏あるいは天を頂き、卓越した教祖よりその崇高な教えを基にして、更にその後出現する優秀な信者によって一層理論武装され布教され、信者が拡大しました。

注 幕末から明治にかけて出現しました天理教や黒住教（教派神道）では教祖はいますが、古代からの神社神道には教祖はいません。又儒教の神は人格神ではなく、形が見えない絶対神で天と言います（天命）。

そして大事なことは神道、仏教、儒教は時の政権が統治のためや政権安定のために利用する中で普及、発展していったのです。

逆に時の政権が自分のためにならないと判断すればその思想、宗教は禁教となりましたので布教が困難となり衰退します。

キリスト教がそうですね。とは言え普通宗教、思想の教団や関係者はしたたかですので、政権に迎合しながら生き延びていきます。中には途絶することもあります。

時の政権は宗教、思想を利用しますし、宗教家、思想家は布教のため、政権に食い込むために活動します。

それでは古代から順次時の政権と三教について関係、絡みを見てみましょう。

1、古代の大和王朝

(1) 日本固有の神と異国の神である仏との関係

① 飛鳥時代

神道そのものについては前編で語りました。

日本の神様は大きく分けて天つ神（あまつかみ）と国つ神（くにつかみ）とがありました。天つ神は古事記・日本書紀に記述がある神々で、天照大神を皇祖神とする天皇家の祖霊神の神々です。一方国つ神は大和の豪族、地方の豪族たちのそれぞれの祖霊神と村々の村民が祭る鎮守の神たちや産土神（うぶすながみ）です。

天皇家の祖霊神と豪族の祖霊神・村の鎮守の神とは全く対象の神様たちが違います。（後世は天照の下に併合されます）

大和の豪族連合の長である大和王朝（飛鳥時代）が日本国を統治するために、天皇が自分は天照大神の子孫であると表明しても、豪族たちや

一般人は自分たちの神とは違いますので、天皇の統治権の確立や権威につながりません。

時の大和王朝（飛鳥時代）は統治権の確立のため、中央集権を即ち中国に見習い律令国家を目指していました。

その頃仏教が日本に伝来しました。（欽明天皇時代 538年）この仏教の教えが尊いことは去ることながら、この仏教を大和王朝の統治の確立のために使えると判断した人々がおりました。それはその後の天皇家の人達で、特に推古天皇（554～628年）とその摂政である聖徳太子（574～622年）です。

天皇を皇祖神の天つ神の子孫であるとして絶対的権威として打ち立てるには難しさがあります。それは各豪族はそれぞれの祖霊神（国つ神）を持っているからです。

仏教は仏（釈迦）は全ての人への絶対神です。天皇家を含めて各々の豪族たちの持っている多くの祖霊神とは違います。

推古天皇は世の絶対神である仏を頂上に頂いて、天皇はもとよりすべての豪族や庶民が共通の神として敬い、天皇が仏の次の地位を確立して日本国を統治することを考えました。

この考え方は中国（隋、唐）でも朝鮮の百済でも取り入れ、王権の統治に役立てました。

欽明天皇以降の各天皇は仏教の取り入れを考えました。しかし皇祖神との関係がありますし、豪族たちが自分たちの祖霊神をたてて異国の神である仏教に対し抵抗勢力となり仏教の振興は容易ではありません・

中央集権国家樹立には豪族の多くは反対です。天皇に対する自分たちの権力の維持を求めます。

祖霊神を立てて豪族権力の向上維持を求める代表は物部氏です。一方天皇家の興隆と言うより中央集権の強い朝廷（政府）の建設を目論み、朝廷の中で天皇を上回る実権を求めていた蘇我氏は仏教振興に積極的です。

政治権力の実権を握るために、仏教振興派天皇家及び同じく蘇我氏と仏教反対派の物部氏とが対立の構図となります。

そして天皇家（聖徳太子）と蘇我馬子の連合は物部氏を滅ぼします（587年）。中央集権国家を目指す天皇家と蘇我氏の勝利です。

蘇我氏は法興寺（飛鳥寺）（588～96年）を建てて飛鳥地方に仏教の地盤を作ります。

一方天皇家（聖徳太子）は難波に四天王寺（593年）、斑鳩に宮（法隆寺）（607年）を建てて仏教の地盤作りを行います。

ついで天皇家と蘇我氏は朝廷で実権争奪の対立関係になります。聖徳太子が没した（622年）後、蘇我氏は朝廷で盤石の権力を持つことになりました。

しかし蘇我入鹿は絶頂期に中大兄皇子（後の天智天皇）と中堅貴族である中臣鎌足に暗殺され、蘇我氏は滅亡します。（645年）

大和王朝の実権は天皇家に戻り、補佐は藤原家（中臣改め）の体制になりました。

その後天智天皇は朝鮮で百済・唐連合軍と戦うべく中央集権国家を目指します。この戦い（白村江の戦いー663年）は敗れますが、敗戦後も律令国家を目指します。そのために仏教による鎮護国家をうたい、全国民共通の神である仏の下に天皇があり、その下に臣下、百姓と位置づけました。

仏、天皇、臣下、百姓を位置づけるために国民全体に仏教の布教を図りました。

②奈良時代・平安時代

奈良時代には平城京に東大寺（752年）各地に国分寺を建設して仏教の偉大さを知らしめ、又国民に仏教を慣れ親しみさせました。

一方天皇家の宗教による統治は神道の利用も行います。上述のように天皇家も豪族たちもそれぞれの神々を持つ中で、神道を如何にして天皇家の皇祖神である天照大神の下で一本化するかです。

大昔から天皇家は地元神（豪族の神）を大事にします。伊勢神宮がいつ創建されたかははっきりしませんが、天皇家の祖霊神（皇祖神である天照大神）はもともと大和の皇居の中で祭られていたのです。ある時大和で疫病がはやり多くの人々が亡くなりました。これは天照大神との地元の神である三輪神社（大神神社）とが仲が良くないせいだということになって、地元神の方をそのままにして天照の方を動座してもらうことにな

りました。場所が伊勢になったのは神武天皇の東征のルートに関係ある
かもしれません。占領軍である天皇家が被占領の三輪族の三輪神社をそ
のままにして自分の祖霊神を移したのです。

天皇家は地元神を大和だけでなく全国全ての神々を大事にしました。
そうしなければ豪族たちは天皇家に従いません。

^{やましろ}
山背（京都）の賀茂神社は鴨族の神社ですが、平安京になっても地元
神として大事にされました。秦氏の伏見稻荷も同じです。

一方朝廷は律令制度（大宝律令701年）のもとで神々の管理を始め
ました。

官社（式内社）を定め、幣帛制度（神に貢物を奉獻する。各地の神社は
都の朝廷にもらいに来る）を定めます。そして神階制度（正一位、従一
位・・・・）を定め神をランクづけしました。

今でもありますね。正一位天照大神、正一位稻荷大社とかです。

国司は着任すると管轄の神社に参拝して地方の神社を国としての尊崇
を表明すると同時に国司(朝廷)の管轄下にあることを認めさせるのです。

こうして豪族・地方の神社を朝廷の統制下に置こうとする神祇制度は出
来たのですが、地方の神社はこの制度ではなかなか従いません。うまく軌
道に乗りませんでした。

そこで出て来たのが神仏習合の政策です。これは神道を仏教の中に習
合してしまおうという政策となりました。

神社の中にはお寺を、お寺の中には神社を併存させます。お寺の近く
に神社を配置しました。本地垂迹で仏や菩薩が姿を変えて神となり衆世
を救済するとの論法をとります。天照大神すら大日如来が姿を変えたも
のとされました。

現在でもお寺の境内に神社が見うけられます。

この政策は大成功でした。日本は神道と仏教を一本化させたのです。

この政策は平安時代更に武士の政権の鎌倉時代、室町時代、戦国時代
そして江戸時代まで続きます。

以後公家も武家も日本の各政権は神仏習合で神と仏を整理し、管理下
に置いたのです。仏の方が上位です。

神様の地位向上を主張した国学の学者が江戸時代に現れました。

明治に入り廃仏毀釈によって神と仏は分離されます。

(2) 儒教の伝来

漢学の内容は、中国の古典にある経（易・書・詩・礼・春秋等）、儒教（論語・孟子）、中国の歴史書（史記・漢書・後漢書等）等々を学ぶので即ち中国の文化を学ぶのです。

更に大事なことは漢文です。漢文の読み書きができないと中国とのやり取りが出来ないことはもとより、日本国内での公用語は漢文でしたので貴族、官吏は漢学の読み書きが必須の学問でした。もちろん僧侶もお経の字は漢文ですので、充分勉強の必要があります。漢文は日本ではその後本来の中国の漢文とは少し変化し、和様漢文（候文）となりますが、公用語としては江戸時代まで使用されます。

古代の儒教（論語、孟子）は貴族の教養、常識、又漢文の練習として習得されていったと思われます。学者たちは相当習熟して一般貴族に講義をしました。

平安時代までに儒教を特に思想、宗教として政権維持のために取り入れた様子はありません。文化としての重要さはあります。

論語や孟子が貴族の道德教育に役立ったのでしょうか。

2、中世の武家政権

(1) 習合された神道と仏教

それでは再び奈良時代から平安時代にかけて神仏習合とされてしまった神道の話です。

神仏習合政策は、仏が優位の習合と言え、伊勢神宮だけは自律的で神宮境内に僧侶は入れませんでした。

伊勢神宮は天皇家の皇祖神ですので、皇室関係しか参拝を許されませんでした。平安時代に入り藤原摂関家が許され、鎌倉時代に入り、源頼朝にも奉納が許されました。そしてだんだん一般人の参拝が許されるようになりました。もちろん今日もそうです。

伊勢神宮だけでなく。各地の神社は領主や一般百姓たちにも人気です。しかし中央政権の直接的な支配は強くありませんでした。

室町時代の後期に京都の吉田神社の神官の吉田兼俱（かねとも）が天照大神を第一として地方の神社の統合しようとし、唯一神道とか惟神（かむながら）の道を唱えました。律令の神社制度がその後緩んでいたのものを立て直しを図ったのです。これはある程度成功し、神社の社格を決めたり神主の叙位（位階）は吉田家を通して朝廷に奏上される

システムが出来ました。

これは吉田神道と言われ、江戸時代まで吉田家は神道に影響力を持つ家となりました。

仏教は奈良時代、平安時代、鎌倉時代、室町時代、戦国時代、江戸時代と各政権が保護し、政権の管理下に置きます。ひるがえって仏法と王法が対等との僧侶の意識が出てきます。そこから政権にはむかうこともありました（延暦寺、高野山や東大寺等の僧兵。そして織田信長にはむかった本願寺）。しかし寺や僧侶が政権をねらうことはありませんでした。

戦国時代にキリスト教の布教が盛んになりましたが、政治的な判断で豊臣秀吉や徳川家によって禁教となり、結果的に仏教と神道は政権に一層保護されることとなります。

(2) 二度目の儒教伝来

鎌倉時代に入りまして禅僧が改めて儒教を持ちこみ禅宗と合わせ儒教の教えを説きました。

宗教的なあの世、この世の説明は仏教で出来ますが、この世での道徳基盤、特に為政者（武家、公家）の道徳、倫理の教育は儒教が優れていると考えたのです。

鎌倉時代の禅僧は幕府の政治の官僚の役割もしていました。ここで武士層にも儒教が知られるようになりました。

しかし政治的に利用されての普及とは行きませんでした。

鎌倉幕府は後醍醐天皇に滅ぼされます。後醍醐天皇は中国の皇帝のように天皇専制で下級貴族を官僚に登用して政治を行う方向を打ち出します。これは公卿世襲の朝廷政治と異なります。

後醍醐天皇も側近の北畠親房も当時の為政者の教養として儒教に影響を受けていたと思われませんがどの程度かはつきりしません。

儒教は易姓革命を認めます（天命によって王朝が代わっても良い）。中国は王朝が幾代も代わってきました。しかし日本は神武天皇以来王朝が代わらない万世一系を主張されて来ました。

後醍醐天皇も北親房も儒教的な政権の考えをそのまま取り入れては、天皇家への謀反、転覆を容認してしまうこととなります。

とにもかくにも後醍醐天皇は没し、南北朝は北朝が存続し、足利時代となります。

儒教は禅宗や天台宗の仏教の僧侶が為政者の教養、道徳として伝えて行きます。

足利幕府や織田信長、豊臣秀吉が政治的に利用又、政策として儒教を取り入れた形跡はありません。

3、近世の三教の位置

(1) 神道と仏教

江戸時代の仏教です。仏教は神道の上位にある公認の宗教で、徳川幕府の統治機構の一翼を担います。キリスト教を禁教にするためにすべての国民をどこかの寺の檀家（宗徒）にしました。これによりキリスト教廃絶の効果はありました。そして寺は村役場の戸籍（住民登録）の係の役割を幕府や藩に代わって行うことになり、寺は武家政権の治世（行政）の一機関となりました。

寺社奉行を置いてしっかり管理すると共に幕府も藩も寺の維持に資金も出しました。

しかし武家政権の一機関となり檀家制度で信者は安易に確保できます。

どの宗派も布教に力を入れませんが、僧侶は勉強しなくなります。

江戸時代に仏教史上に残る高僧と言われる人は、宋から来日して禅宗の黄檗宗（黄檗宗）を広めた隠元和尚ぐらいでしょうか。家康に仕えた天海和尚（天台宗）や崇伝和尚（臨済宗）は官吏としての有能さを見出されたのです。

いずれも江戸時代初期の人で、その後仏教そのものを深く追求して新説や新しい解釈を広めた僧侶はいません。

僧侶ではありませんが18世紀の初めに富永仲基が“大乘仏教の経典は釈迦の教えではない”と大乘非仏説を唱えましたが、仏教学説への振興にはつながりませんでした。

江戸時代の仏教は政権に過保護された故に、教えの停滞期に入ったと考えて良いでしょう。

江戸時代の神道です。

布教に苦勞しなくなり、仏教学が低迷する中で江戸時代中ごろ国学が起きます。和学とも言います。この国学の流れが江戸時代後期の神道に大きく影響を及ぼし、尊皇攘夷思想に発展します。

もともと和歌や古事記、日本書紀の研究であり契沖（1640～1702年）が国学の先駆者です。その後、荷田春満（1669～1736年）、

その弟子の賀茂真淵（1697～1769年）が出、万葉集や源氏物語の研究が深まり、本居宣長（1730～1801年）によって更に国学の研究は進みましたが、宣長は古道、神ながら道と称し神道にもふれるようになりまし。

この神道部門を拡大解釈して国学の中心は記紀神話による神道であると、更に国粹主義の弟子を養成したのが平田篤胤（1776～1843年）です。

幕末に地方の下級武士や庄屋層に尊王攘夷思想を普及させたのは篤胤とその弟子たちです。

水戸にも国学が起こります。江戸初期（水戸光圀）から中期は「大日本史」の編集や古事記、日本書紀の研究が盛んになり、後期は尊王と神道に傾斜し、幕末の尊王攘夷思想の発端となります。

水戸の国学（水戸学）の特徴は儒学を取り入れていることです。一方 上記本居宣長、平田篤胤の流れの国学は儒学を排撃しているところが違います。

後期水戸学の学者では藤田幽谷、藤田東湖、会沢正司祭志斎が有名です。

攘夷論で海禁（鎖国）を主張（1825年一新論）した会沢正志斎はその後開国に変わりました（1862年一時務策）。鎖国しての海防は無理と気づいたのです。これにより幕末水戸内では思想上大変混乱しました。

（2）三度目の儒教伝来

戦国時代末から江戸時代の儒教です。

儒教の伝来の最初の時期は仏教と同じ時期かそれとも更に一世紀前の5世紀のことかはっきりしません。二度目は鎌倉時代の初めで、宋に留学していた禅僧が禅と共に持ち帰りました。三度目は戦国期末です。この時は朱子学、陽明学と古学が同時に入って来まし。

いずれも孔子が説いた儒教の解釈方法や学び方について三つの流派が出来ていたのです。

先ず朱子学ですが、概容については第1部で述べましよう朱子は儒教の学び方は四書（大学・中庸・論語・孟子）を重んじます。孔子の教えにはない理気説（理気二元論）を打ち立てまし。大変難しい哲学で解釈が多くあります。「気は万物（物質的素材）の元で、理は気のあり方を規定する。それは仁・義・礼・知である」

観念的な思想と言われていまし。又「人間は努力して学問をすれば仁となり大臣になれる」、と言っており、明時代以降の科擧の試験では、儒教

の科目は朱子学で解答しなければなりませんでした。明時代は朱子学が官学となり興隆しました。

日本で朱子学を広めましたのは戦国末の藤原惺窩、江戸時代初期の林羅山、木下順庵、中期の室鳩巢、新井白石、18世紀末の松平定信（老中）の学者たちです。

特に老中松平定信は、朱子学を幕府の正教とします。昌平坂学問所で林家（林羅山の子孫）に命じ、御家人の子弟に朱子学を学ばせました。

次に日本の朱子学の特徴を記します。

儒教は孔子、孟子、朱子も易姓革命を認めます。即ち、「天命によって王朝が代わっても良い」との考えです。これは家臣による下剋上を認めることとなります。孔子も孟子も王が善政を行わなくなったらその時王は既に王ではなく庶民になり下がったのであるから、庶民になった王を討って新たな王朝を建てても良いとの考え方です。

この思想では万世一系の天皇家は守れませんし、家臣の裏切りや下剋上を絶対否定する徳川家では認められません。

更に儒教、特に朱子は中国の王朝が中央集権国家であって、封建体制を前提にしていません。

従って王朝の官僚は科举制度で一般人が受験に合格すれば大臣への起用があります。日本の封建制では幕府や藩の役職は世襲です。身分によって武士も役職が固定され、武士以外の登用は原則ありません。

このような儒教（朱子学も）の根本思想を外して日本の為政者や朱子学等の儒学者は儒教を広めました。

そして日本の儒学者は、朱子が大事にした五輪「父子、君臣、夫婦、長幼、朋友の関係」を変形しました。

「君臣上下の身分的秩序を絶対視」（名分論）を基本にしました。こうしなければ徳川封建体制はなりたたないのです。名分論は日本で作られた儒教です。

この名分論は水戸学にも取り入れられました。水戸学の国学、儒教も徳川幕藩体制から外れることは出来ませんでした。

水戸学派は尊皇攘夷の発祥ですが、尊王と言っても幕府を倒して朝廷政治にしようと言うことではありません。「徳川家は天皇から委任を受けて政権を運営している」との見解で、天皇—幕府の体制は変えるつもりはありません。

日本の儒教は、日本の封建体制の中で自由に変形され、都合の悪い所は捨てられました。しかし幕府の幹部はその他の項目については、為政者の道德教育にはすばらしい教えとして受け入れられました。

朱子学から分派した陽明学（王学）です。明時代の王陽明が唱えた説です。

陽明学が何かは一層難しいのですが、要するに朱子学が観念的な静の道德に対し、陽明学は実践的なものとされています。

陽明学を日本に持ち込んだのは中江藤樹ですが、陽明学を信奉した大塩平八郎（大塩平八郎の乱）、吉田松陰、西郷隆盛を見ると分かるような気がします。そして戦後の三島由紀夫もそうです。体制に対し反抗する傾向があります。故に徳川幕府はこの学派を好みませんでした。

戦国末期から江戸初期に儒教はもう一つ学派の古学・考証学が明、清から入りました。朱子が四書（大学・中庸・論語・孟子）を最重要の教科書とすることを主張しましたが、この学派は孔子が弟子に講義した時の教科書である五経（易経・書経・詩経・礼記・春秋）を学ぶことの方が大事と主張するのです。

この学派の流れをひいた17世紀初め伊藤仁斎は朱子の論理を認めません。大事なのは孔子のおしえであるとして論語に重点をおきました（古義学）。

又荻生徂徠は5代将軍綱吉や8代将軍の諮問に答えることもありましたが、次第に漢文学や漢詩の方に力を注ぎました（古文辞学）。蛇足かと思いますが、徂徠は赤穂浪士の切腹論を主張した人です。

儒教はいくつもの学派が出来ますが、徳川幕府の正教は朱子学です。それも日本流の朱子学です。

（3）幕末の神道（国学）、儒教と仏教

それでは幕末において幕府、尊王攘夷派、討幕派が三教（神道・仏教・儒教）からどのように影響され、逆にどのように利用したかです。

先ず幕府です。寺を幕府の組織の一部にして、キリスト教を禁教にして国民を全てどこかの寺に所属させました。キリスト教に対抗するためには現世とあの世についての確かな教え（宗教理念）を持っている仏教が必要だったのです。教えのない神道ではキリスト教に対抗するには弱いのです。

しかしその後の幕府の寺への過保護と寺が行政機関の一部を担うことで、僧侶自身が仏教発展への進化を怠りました。

一方神道は、国学、儒教の専門家が神道論を創造、進化させました。儒教は特に朱子学（日本流）が幕府の正教となり、武士の子弟の教養の必須の科目となり、発展しますし、その他の学派も競い合います。

幕末の水戸学は、国学（神道を含む）と儒教を混合させて幕藩体制維持の理論を作ります。それが尊王攘夷論です。尊王と言っても天皇、将軍、大名の制度は動かしません。攘夷派は海禁（鎖国）のままでの海防を主張しました。この理論は全国の下級武士に支持され、彼らの活動の根本思想になりました。

しかし尊王攘夷論を作った水戸学の会沢正志斎が海禁より開国に転じたことで水戸藩は混乱状態になりました。

平田篤胤の神道は尊王攘夷から極端な国粹主義に向かい、幕末から明治にかけて勢力の拡大にはつながりませんでした。

幕末の開国への勢力は、蘭学や洋学、英学を修め、西洋の科学技術を導入しなければ日本の防衛、発展はないと主張した人々です。

幕府も開国に舵をきります。主要な多くの大名も開国の必要を認識していきます。そして攘夷の理論の推奨者の水戸学派も開国に傾いて行きます。

しかし地方の多くの浪士は鎖国の主張を変えません。攘夷派の浪士による開国派への襲撃が起こります。

開国を主張する者の中には天皇、将軍、大名の制度を維持する勢力と徳川幕府を解体して天皇の下に政府（王政復古）を作ろうとする勢力がありました。

結局、武力討幕派（西郷隆盛、大久保利通、木戸孝允（桂小五郎）、）によって徳川幕府は滅亡します。

4、明治政府以降の三教の位置

（1）神道と仏教の位置の逆転

さて明治にはいりまして、維新政府ではどのようにして国体を維持して発展させるか議論となりました。

これまでは日本の国体の支柱は徳川家でした。そして幕府（公儀）によって武士たちが政権を運営してきました。

これからは西郷、大久保、木戸や土佐、佐賀などの藩の有力者（家臣）と公家による合議の政治となります。しかし徳川家に代わる日本国民が納得す

る国の支柱の人（家）が必要と考えられました。

幕末の尊王論から、討幕の旗頭をお願いした天皇家に国体の支柱なってもらうことにしました。

天皇家が国体の支柱になってもらう理論構成は江戸時代の国学の学者によって出来上がっています。それは記紀神話から天照大神、神武天皇、万世一系の天皇家の高貴な素性の確かさです。

このことはインテリ階級は知っています。しかし一般国民には理解しにくいのが当時の常識です。当時一般国民は將軍様が絶対的な君主で、天皇は神主の親玉位にしか思っていない人が多かったのです。

そこで維新政府は日本国での天皇家の侵しがたい崇高な絶対性を国民に知らしめなければなりません。天皇の威信を顕示しなければなりません。

それは天皇家と日本の神様即ち神道とはイコールであって、記紀の記述から日本国誕生、天照大神、神武天皇、そして天皇家が万世一系であって天皇家は日本国を誕生させた神を皇祖とする。こうして天皇を神に仕立て上げます。

この理論の徹底を図るために維新政府は政策を打ち出します。それは神社神道の自立です。神仏習合で神が仏教の傘下には偉大なる日本の神イコール天皇家となりません。

そこで明治政府は「神仏分離令」を打ち出し、仏教傘下の神社を仏教からの自立をうながします。

神社の中の仏教関係（建物、仏像等）捨てさせ、神宮寺から寺の部分を抹消して本来の神社とする（例えば石清水八幡宮寺は石清水八幡宮、鶴岡八幡宮寺は鶴岡八幡宮です）。社僧（僧侶の神主）を廃止して神社から僧侶を追い出します。

古代からの日本の神と仏教との関係を公家政権も武家政権も神仏習合、神仏混淆、本地垂迹ということで、仏を天皇の上に頂き、仏（神社を傘下）一天皇一公家・武家一百姓の序列で日本を統治してきました。

これを代えて仏を外して、神（神道）一天皇で日本を統治することにしたのです。

これで国の支柱たる天皇の威信を確立しようとしてしました。

「神仏分離令」は一般の多くには廃仏毀釈と理解され、全国に喧伝されました。寺や仏像、仏具を壊し、仏教を捨てよとの意味にとられました。

地域や寺によってはかなり激しく壊されました。破壊された寺では奈良の興福寺が有名です。興福寺は東大寺より大きかったのですが、今日の両

寺の規模は格段の差があります。

当初、僧侶たちは積極的に政府に抵抗運動をせず、じっと堪えるだけでした。

江戸時代の僧侶たちは余りにも保護されていて、急に立ち上がる力を持っていなかったのです。

但しその後、浄土真宗の僧を先頭に徐々に自分の使命を思い起し、政府に嚴重抗議します。政府は廃仏毀釈ではないことを国民に触れました。廃仏毀釈運動は醒めていきます。

しかし政府の神仏分離令により神社神道は、仏教やキリスト教等の宗教とは異なり、宗教の範ちゅうではなく「国家神道」として位置づけられました。(天理教、黒住教、金光教等の教派神道は宗教の範ちゅうです)。

これで天照大神—神武天皇—明治天皇—国民(臣民)の国体を形成しました。天皇は現人神(あらひとがみ)です。

このようにして明治政府は神道と天皇の一体化で国体の支柱とした新国家を作り上げました。

この国体形成は以後日本を国粹主義・超国家主義(注)に走らせ、軍国主義に向かいます。

太平洋戦争前の日本の国体は、明治政府の国民国家樹立のためにとった国学(儒学道徳を含めて)—神道論(古事記・日本書紀)—天皇制の思想的根拠の確立とそれによる神社神道の国教化、そして天皇を専制君主に仕立て上げる(実権はない)システムでありました。

神道を利用したこのシステムは日露戦争、第一次世界大戦までは機能していたのですが、以後は超国家主義と軍国主義に走らせました。

世界を相手に戦争するなど有史以来どの政治家、武人が考えたか、そんな奇人は日本にはいませんでした。

一旦進み始めた道はもう止まれず、破滅めざして進まざるを得なかったのでしょう。

明治の元勳たちが作ったシステムに問題があったのでしょうか、それともその後の政治家、軍人に問題があったのでしょうか。いやまた特定の責任者はおらず、戦前の国民は一億総懺悔でみんなの責任と言うことでしょうか。

飛鳥の時代から時の政権は、政権の確立、維持のために宗教や思想を利用して来ました。明治政府のとした神道の国教化—天皇の絶対化(現人神)による国体維持政策(システム)は敗戦で終わりました。

それでは神道が国策により国家神道になり、天皇の権威の裏付けの役目を担うことになった中で、天皇家は仏教をどうされたのでしょうか。

天皇家は維新政府に仏教を捨てさせられました。仏教徒をおやめになりました。

江戸時代まで天皇家は御所（内裏）には仏間（黒戸）をもうけられ、仏教に帰依されていました。

仏間にあった歴代天皇の位牌は京都の泉涌寺に預けられました。仏壇は皇居には無くなりました。

天皇家は奈良時代から孝明天皇（明治天皇の父君）まで葬式は仏式です。しかし明治天皇から大正天皇、昭和天皇と神式で行われました。もう天皇家には仏教はありません。

仏教はもともと天皇家が朝鮮経由輸入された宗教で、天皇家が旗頭で日本国内に広められたものです。

奈良の東大寺の名を出すまでもなく、天皇家が直接係った勅願寺や門跡寺院等の有名寺院は今でも多く存立します。

江戸時代まで宗派を問わず日本仏教界の頂点は天皇でした。

現在、天皇家は位牌を預けられた泉涌寺にお参りされることはあるようですが、公式には仏教徒には復帰されていません。

明治政府がシステムとして作った国家神道はなくなり、戦後は宗教選択は自由となりましたが、天皇家は仏教徒には復帰されていません。

（２）教えは続く儒教

最後に明治以降の儒教です。

教育勅語を初め学校教育では、儒教道徳の影響は受けており、一般人の多くは知ってか知らずか儒教道徳によって日常をおくります。

学校では漢文の教科があり、論語や孟子などを学びます。（一部ですが）教養の科目でもあります。戦前の道徳教育の基は、西洋のキリスト教道徳が入っていませんので儒教を主として取り入れざるを得ません。神道は天皇への尊崇は言えますが、それ以外がほとんどありません。仏教も悪いことをしたら地獄に行くはありますが、やはり国民道徳の基本は儒教の教えからが多いと思います。（君臣、親子、夫婦、長幼、朋友）

明治以降日本の儒教を政権がどのように利用したかです。一例を上げて説目に変えます。

江戸末期に農政家として数々の実績を上げた二宮尊徳（武士ではありません）

ん)は太平洋戦争前、小学校の校庭には必ずその像が建っていました。もちろん政府が建てさせました。戦後もしばらくありました。

像は江戸時代の貧しそうな少年が薪を背負って本を読みながら歩いている姿です。仕事をしながら勉強している姿です。勉学の大事さを象徴させています。

ところで少年尊徳が読んでいる本が「大学」です。朱子学の大事な教科である「大学」なのです。

と言うことは戦前の政府は儒教でも朱子学が好きだったのですね。

尚、「大学」は「論語」や「孟子」より難解でとても小学校の少年では無理です。少年二宮尊徳の優秀さを示すものでもありますと共に儒教が道德・教育の基本であることを示しています。

おわりに

三教を古代より政治的に見てきました。

思想・宗教はその教えを多くの人に広めるために布教活動をします。そのために時の政権に保護を求めます。

一方政権側は思想・宗教を政権の維持のために利用しようとします。

政権にとって思わしくないと思えば禁教とします。思想・宗教の布教者は政権の弾圧に対し抵抗し更に潜行して生き延びる道を探します。滅んでしまう場合もあります。

信仰としての三教（神道・仏教・儒教）は今でも政権と関係なく多くの日本人の間で尊崇されています。

しかし政権と三教は歴史的には互いに利用し合って歩んで来たのです。

以上

2014年12月1日

参考文献

- 古事記 校注 倉野憲司 武田祐吉 岩波書店 1958年
- 古事記 三浦祐之 文芸春秋 2002年
- 日本書紀（上・中・下） 山田宗睦 教育社 1992年

- 神国論の系譜 鍛代敏雄 法蔵館 2006年
- 神道の成立 高取正男 平凡社 1993年
- 神道入門 井上順孝 平凡社 2006年
- 神社と戦国武将 (別冊宝島) 宝島社 2014年
- 日本の大神社総本社名鑑 (歴史読本) 新人物往来社 2007年
- 神道の本 学習研究社 1992年
- 神々の明治維新 安丸良夫 岩波書店 1979年
- 中世の神と仏 (日本史リブレット) 末木文美士
- 天皇制国家と宗教 村上重良 講談社学術文庫 2007年
- 論語 (上・下) 吉川幸次 朝日選書 1996年
- 論語とは何か 加地伸行 中央信書 1990年
- 論語 (中国古典百語百話7) 久米旺生 PHP研究所 1987
- 孟子 貝塚茂樹 講談社学術文庫 2004年
- 大学 全訳注 宇野哲人 講談社学術文庫 1983
- 中庸 全訳注 宇野哲人 講談社学術文庫 1983
- 儒教と何か 加地伸行 中央新書 1990
- 書経・易経 (中国古典文学大系1) 赤塚 忠 平凡社 1972
- 仏教学序説 山口益 横超慧日 安藤俊雄 船橋一哉 文功社 1961
- 廃仏毀釈百年 佐伯恵達 みやざき文庫20 鉦脈社 2010
- 法華入門 菅野博史 岩波新書 2001
- 大乘経典の誕生 平岡聡 筑摩書房 2015
- 葬式仏教 圭室諦成 大法輪閣 1976
- 禅 紀野一義 日本放送出版協会 1966
- 日本思想体系 富永仲基 山片蟠桃 岩名書店 1973
- 黒田俊雄著作集第1巻 権門体制論 黒田俊雄 法蔵館 1994
- 仏像の歴史 久野 健 山川出版社 1987
- 水戸学 (日本思想体系53) 校注者 今井宇三郎 瀬谷善彦 尾藤正英
岩波書店
- 国学運動の思想 (日本思想体系51) 芳賀登 松本三之介 岩波書店
- 国史大辞典 吉川弘文館 1969-1990
- 日本国語大辞典 小学館 1972